
【短編企画・しずくとつむぐ】 告白の勇気

玉紀 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【短編企画・しずくとつむぐ】 告白の勇氣

【Nコード】

N9710T

【作者名】

玉紀 直

【あらすじ】

【短編企画・しずくとつむぐ】『高校二年生のある梅雨の日。放課後、図書室の日本文学の棚前に呼び出された僕は名前も知らない女の子から告白された』

＊＊同じシチュエーションで表現の違いを楽しむ趣旨の筈が、その趣旨を破ってしまっている様な気がします。

＊＊名も知らない女の子からいきなり告げられた告白から、彼が得

た勇氣……。そんなお話です。

（前書き）

*そうじ たかひろさんの短編企画に参加させて頂きました。

企画概要破りの様な作品です。申し訳ありません。
お暇潰し程度にお読み頂けると幸いです……。

「あたしの事、好きになって下さい！」

普通“告白”という物は、「好きです」という、自分の気持ちを伝えるものであると思われる。

しかしその時、図書室の日本文学が並んだ棚の前で彼が受けた告白は、「好きになって下さい」という“お願い”だった。

「え？ あの……。ってか、君、誰？」

彼は困惑する。当然だろう。今目の前で決死の覚悟を口にした女子生徒を、彼は全く知らないのだから。

放課後の図書室には誰も居ない。本来ならば居るはずの図書委員と司書の先生は市立図書館へ研修見学会へ出ている為、図書室は無人解放状態だった。

いつもの放課後なら数人の生徒が見られるのだが、今この広い書物の海に囲まれているのは彼と見知らぬ女子生徒のみだ。

外はジツトリとした雨降り。六月梅雨特有の湿っぽさ。こんな時に、より湿っぽさを感じさせる本の海に囲まれるのも正直鬱陶しくもある。他に生徒が居ないのは、そんな天気のせいかもしれない。

「あの……。駄目ですか……？」

勢いを付けて告白したものの、少し弱気になる彼女。敬語を使っているという事は下級生らしい。彼は高校二年生なので彼女は一年生なのだろう。

「駄目……。って、いうかさ……。あのさ」

彼はうまく言葉が出て来ない。好きになって下さい、という事は、彼女は彼を好きなのだろう。それだからこんな所まで呼び出して答

えを欲しがっているのだ。

今日の昼休みに図書室へ来ていた彼は、いつものように日本文学が並ぶ棚の前で本を眺めていた。これは彼の日課なのだ。

そろそろ教室へ戻ろうかとしていた時、この少女がいきなり目の前に現れ、「放課後、ここへ来て下さい！」と彼に声をかけた。

なんだろうかと不審に思いながらも図書室へやって来た彼は、今この不思議な告白を受けている。

彼女は彼の言葉を待つように、彼の顔を凝視していた。言い辛い事ではあったが、こういった事はハッキリと言わなければ相手にも失礼だ。彼は彼女から視線を逸らし、重い口を開く。

「あの……僕、好きな人が居るんだ。……だから、悪いけど……」
「知ってます！」

彼の言葉は止まり、視線は再び彼女へと向けられた。

「知ってます！ でも……、あたしの事を好きになってくれないかな、って！」

「でも、それって、おかしいだろ……」

「でも、その好きな人と付き合っている訳じゃないですよ？！」
彼女は引かない。

もちろん彼は意中の女子と付き合ってなどいないし、告白さえもしていないのだ。

意中の女子は同じ二年の図書委員。

本が好きで、いつも熱心に貸し出し業務をしている子だ。

実は彼が図書室通いをしているのは、彼女に会う為。——とは言っても、貸出カウンターが絶妙な位置で見えるこの日本文学の棚の前から、彼女を眺めているだけなのだが……。

彼は元々そんなに積極的な性格では無く、もちろん告白などしてない。なかなかその勇気が持てないでいる状態なのだ。

「付き合っではないけど、でも、好きな子が居るのは変わり無いから……。それなのに、君を好きになる事は出来ないよ」

彼は自分の気持ちを素直に伝える。だんだんと最初の勢いが無くなつて来た彼女を見ながら、ひとつ不思議に思つた事を訊ねた。

「僕に好きな人が居るって、どうして知ってるの？」

「先輩、貸出カウンターにいつも居る二年の先輩の事、いつも見てるみたいだから。多分そうだと思つて」

「それが解かつてるのに、『好きになつて下さい』なんて……。そんな事言えるなんて凄いね」

それは本心だった。恋する女は強い、とはよく言うが、本棚の陰から好きな子を眺める事しか出来ない自分には、きつと持てない勇氣だろう。

すると彼女は、消沈気味になつていた表情をぱあっと明るくさせた。

「だって、少しでも望みが有りそうなら、それにチャレンジするのって、大切だし！」

彼の胸が、ズキンツと痛んだ気がする。

本に囲まれ、カウンターでいつも笑っている意中の彼女。彼女には、付き合っている人が居るという事実も、好きな男子が居るといふ噂も無い。

告白するチャンスはあるのに、毎日本の陰から彼女を見ているだけで、実行する勇氣を持てない自分。

しかし、目の前に居る名前も知らない女子生徒は違ふ。彼女は少しの望みに賭けて自分の気持ちを伝える勝負に出た。

「有難うございます、先輩。あたし、言つてみて良かった。ちゃんと、先輩の気持ち聞けたもん。チャレンジして、良かったよ」

彼女は泣きそうな目をしながらも、その表情を笑顔でいっぱいに満たす。そして頭を下げると、踵を返して彼の前から走り去った。

ドアが閉まる音。訪れる静寂の中、しとしとと重苦しい雨の音。彼は顔を上げ、いつも本の間からこっそりと見詰めている貸出力ウンターへ視線を移す。それと一緒に目に入ったのは、カウンターのすぐ横に設けられた児童文学書の書棚。

ふっと、自分と同じように、いつもそのコーナーに一人だけ女の子が立っていたのを思い出した。

あれは、さっきの女子生徒だったのだろう。

彼女も、いつもここから彼を見詰めていたのだ。そして今日、勇気を出したのだろう。

彼はゆっくりとカウンターに近付いた。

カウンターに手をつき、いつもそこに座る意中の彼女を思い浮かべる。

「……僕の事、好きになって下さい」

明日、この言葉を彼女に言おう。彼は、心に決めた。

名前も知らない少女が、彼に勇気をくれた様な気がしたのだ。望みにチャレンジする勇気を……。

重苦しい雨の音。

しかし今の彼には、とても頼もしい、彼へのエールに聴こえる。

『告白の勇氣』

— E N D —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9710t/>

【短編企画・しずくとつむぐ】 告白の勇氣

2011年6月17日12時57分発行